

〔復刻版〕古蹟

帝国古蹟取調会編
〈前身誌『帝国古蹟取調会会報』を含む〉

全3巻・別冊1
一九〇〇年～一九〇四年

●復刻版概要

- ◎体裁——A5判・上製・1、360頁
- ◎別冊——解説・総目次・索引
これのみ分売可 本体価格1、000円＋税 ISBN 978-4-8350-6565-6
- ◎解説——丸山宏(名城大学教授)
- ◎定価——本体揃価格55、000円＋税 ISBN 978-4-8350-6560-1
- ◎推薦——羽賀祥二(名古屋大学教授)
- ◎原本提供——國學院大學図書館

二〇一一年一月 一括刊行

●関連図書のご案内

史蹟名勝天然記念物保存協会 編〔復刻版〕

史蹟名勝天然記念物

全55巻・附録1・別冊2

- ◎大正3年～大正12年・大正15年～昭和19年
- ◎A4判・A5判・上製・総23、392頁
- ◎解説Ⅱ「大正編」丸山宏
「昭和編」高木博志
- ◎推薦Ⅱ荒山正彦・上田正昭・栄原永遠男・羽賀祥二
- ◎定価Ⅱ本体揃価格948、000円＋税

全巻完結！

大正編	配本・巻数	本体揃価格	ISBN
全3巻・附録1・別冊1		98,000円＋税	978-4-8350-4402-6
第1回配本(第4～9巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5376-9
第2回配本(第10～15巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5383-7
第3回配本(第16～21巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5390-5
第4回配本(第22～27巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5397-4
第5回配本(第28～33巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5404-9
第6回配本(第34～39巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5411-7
第7回配本(第40～45巻)		100,000円＋税	978-4-8350-5788-2
第8回配本(第46～50巻)		60,000円＋税	978-4-8350-5775-0
第9回配本(第51～55巻 ＋別冊1)		60,000円＋税	978-4-8350-5781-1

不二出版

〒113-0002
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
フクシミリ03-3812-4464
振替001600-294084

2011/1

明治期 史蹟保護事業の重要資料

明治期より産業発展の過程で、わが国も工業化による国土の開発が進み、文化遺産は破壊の危機にさらされる。

この事態に九条道孝らは一九〇〇(明治三三年)に文化遺産を保存顕彰することを目的に「帝国古蹟取調会」を発足させた。弊社では既に『史蹟名勝天然記念物』を復刻刊行したが、この度その継続前誌ともいえる『帝国古蹟取調会会報』『古蹟』を復刻刊行し、日本文化史・郷土史研究の重要資料として提供する。



第1号 表紙

古蹟

一九〇〇年～一九〇四年
〈前身誌『帝国古蹟取調会会報』を含む〉

全3巻
別冊1

第2巻第2号 表紙

華原宮内省の邸宅(坪井邸主)
武蔵國分寺址(重田文學士)

帝国古蹟取調会 発行

古蹟

第二巻
第二號

筑後人形原古蹟(若林勝那)
古蹟 鑑賞記(田中義成)

体裁——A5判・上製・総1、360ページ

別冊——解説・総目次・索引
これのみ分売可 本体価格1、000円＋税 (ISBN978-4-8350-6565-6)

解説——丸山 宏(名城大学教授)

定価——本体揃価格55、000円＋税 (ISBN978-4-8350-6560-1)

推薦——羽賀祥二(名古屋大学教授)

原本提供——國學院大學図書館

二〇一一年一月 一括刊行

不二出版

●表示価格は全て税別

刊行の辞

一九〇〇年(明治三三)五月、帝国古蹟取調会は西郷従道、土方久元を顧問とし、会長九条道孝、副会長長岡護美等により発足する。同年十二月には歴史学者の喜田貞吉を編集主任とし、機関誌『帝国古蹟取調會会報』が創刊された。翌一九〇一年には、第十五回衆議院に「帝国古蹟取調會国庫補助に関する建議案」が提出採択され、帝国議會でもその存在が認知される。一九〇二年には奈良、福岡、京都に支部が設立され、翌年二月の発行からは『古蹟』と改題する。しかしながら、一九〇四年二月の日露開戦により世情を鑑みやむなく活動を停止する。日本文化史、郷土史研究に欠くことのできない重要資料ではあるが、本誌を所蔵する機関は非常に少なく、この度新たに解説・総目次索引を付して復刻刊行するものである。

不二出版

帝國古蹟取調會設立主書書
泰しく惟るに太古諸冊二神八洲を開拓し天祖大神高天原に照臨し皇祖天皇極原宮に君臨し給ひてより以來茲に幾千年列聖相承けて國光八洲の外に輝かし山河舊によりて歐美を萬世に保てり而して其國體の宇内に超越する其山水の萬國に卓越せるの事實は皆之を史籍に存し之を遺址に印すと雖も古史殘明して遺蹟の遺滅せるもの亦少からず殊に近來文明の昂進土木工事の隆興に際し陵谷を變遷し山野を割断するの舉多きを加へ古來著名の古蹟にして已に其難に罹れるもの少しとせし況や一旦瀕滅して已に世に忘れられたるものに於てをや今や既に内地は外人に向つて開放せらるるを既往に徴し之を將來に測るに古蹟の遺滅遺存更に一層の甚しきものなきを保せず之を思ひて轉々憂慮に堪へざるものあり某等此に慨し茲に本會を組織して周知先聖古哲の遺せる名蹟を取調へ永く之を後世に保存せんとす某等と志を同する大方の諸君は奮て本會を賛成し祖宗以來の名蹟を保護せられん事を乞ふ。

明治三十三年 月 日

復刻版『古蹟』を推薦します

羽賀 祥二 (名古屋大学教授)

私たちはすでに不二出版が刊行した『史蹟名勝天然紀念物』大正編と昭和編を手元に置いて、二十世紀に入った日本社会がいかに歴史的遺蹟に目を向け、再発見し、そして保存してきたのかを、じっくりと考えることができるようになった。この度、史蹟名勝天然紀念物保存協会の先立つて組織された帝国古蹟取調會が発刊した雑誌、『帝国古蹟取調會会報』(『古蹟』と改称)が復刻されることは、今後いつそ近代文化史研究、文化財研究を深めていく上で当を得たものだと思う。
帝国古蹟取調會は日清・日露戦間期、わずか四年半ほど活動したに過ぎない。ごく最近の研究によれば、この間の活動もあまりはかばかしいものではなかったということだ。しかし、この雑誌に寄稿している歴史学者・考古学者は近代史学を代表する人物たちばかりである。吉田東伍・小杉樞郎・坪井正五郎・三宅米吉・喜田貞吉・田中義成らが寄稿している。また志賀重昂や大槻如電ら著名な学者も文章を載せていることも注目されるところである。個別の史蹟の研究や地方からの紹介文だけでなく、会の中心となっていた長岡護良や坪井正五郎、さらに三宅米吉・吉田東伍らが古蹟保存の論説を書いている点も、二十世紀初頭の歴史認識を探る上で貴重な材料を提供することになるだろう。陵墓や古代石碑にかんする論考が目立つこともたいへん興味をひく点である。
日本において歴史的遺蹟への関心や考証、そして保存の動きが始まって、すでに二百年あまりが経った。この雑誌はそのちょうど中間に位置し、また本格的かつ全国的な保存運動の先駆けを示すものでもある。頁を丁寧に繰りながら、一世紀前の論考に耳を傾けたいと思う。

帝国古蹟取調會役員一覽(一九〇〇年五月)

- 顧問 西郷従道 土方久元
会長 九条道孝
副会長 長岡護美
幹事 河上廉之助 杉浦甲子郎
會計監督 磯田正敬
編集主任 川崎八右衛門
學事顧問 喜田貞吉
星野恒 田中義成 坪井正五郎
小杉樞郎 三上參次 三宅米吉
本居豊穎
常務員 伊藤可宗 中田憲信 野村靖
松平正直 増田干信 小松盛政
伊藤博文 板垣退助 原保太郎
二条基弘 細川潤次郎
李家裕二 大隈重信 大浦兼武
奥田義人 渡辺千秋 樺山資紀
金子賢太郎 (他三十名)

近代日本文化財・景観保護関連年表

- 一八七一年 「古器旧物保存方」布告
一八七八年 フェノロサ来日
一八八八年 「臨時全国宝物取調局」設置
一八九四年 志賀重昂「日本風景論」刊行
一八九五年 奈良帝國博物館開館
一八九六年 内務省に古社寺保存会設置
一八九七年 京都帝國博物館開館
「古社寺保存法」制定
一九〇〇年 帝國古蹟取調會発足
「帝國古蹟取調會会報」刊行
一九〇三年 「帝國古蹟取調會会報」、『古蹟』に改題
一九〇四年 帝國古蹟取調會、日露開戦により世情を鑑み、やむなく『古蹟』の廃刊、活動停止
一九一〇年 南葵文庫において史蹟史樹保存に関する茶話会
一九一一年 徳川頼倫等貴族院に「史蹟及天然紀念物に関する建議案」提出
史蹟名勝天然紀念物保存協会発足
一九一四年 「史蹟名勝天然紀念物」刊行開始
一九一九年 「史蹟名勝天然紀念物保存法」制定
庭園協会創立 機関誌『庭園』刊行
一九二三年 「史蹟名勝天然紀念物」休刊
關東大震災
一九二六年 「史蹟名勝天然紀念物」再刊
一九二九年 史蹟名勝天然紀念物保存協会、文部省に移管
「国宝保存法」制定(古社寺保存法は廃止)
「國立公園」刊行(國立公園協会)
一九三三年 「重要美術等ノ保存ニ関スル法律」制定
一九三四年 風景協会設立 機関誌『風景』刊行
一九三五年 和辻哲郎『風土 人間の考察』刊行
一九四五年 敗戦
一九四九年 法隆寺金堂火災
一九五〇年 「文化財保護法」制定

第2巻第2号より

古蹟 第二巻第一號目次
論說考證
筑後國八咫原の石人(志賀重昂)
三田寺町等項宮内郡の龜山
武藏國分府寺の原(中野)
筑後國八咫原の重寶(中野)

古蹟 蘇武卷第六號

蘇武卷第六號 (明治三十八年五月發行)
中田 憲信
右大臣原公は一世の英傑、元弘以來二十餘年、國民上下當年の雲に傳説せしむるの時に當り、能く敵愾の功を奏し、蒼生を救ひ、皇朝を安んじ、天啓の嘉祥を蒙り、國家の勳業を後す。天正十年六月二日、駿河府の旅に於て生を遂げ、而して其遺骸を蘇武の墓に葬る。一は蘇武の阿彌陀寺に在り、一は蘇武の阿彌陀寺に在り、仍て其事實を蘇武の墓に記す。

第2巻第6号より

蘇武卷第六號 (明治三十八年五月發行)
中田 憲信
右大臣原公は一世の英傑、元弘以來二十餘年、國民上下當年の雲に傳説せしむるの時に當り、能く敵愾の功を奏し、蒼生を救ひ、皇朝を安んじ、天啓の嘉祥を蒙り、國家の勳業を後す。天正十年六月二日、駿河府の旅に於て生を遂げ、而して其遺骸を蘇武の墓に葬る。一は蘇武の阿彌陀寺に在り、一は蘇武の阿彌陀寺に在り、仍て其事實を蘇武の墓に記す。